

縁故米 運動

まにゆある

P 1

縁故米運動宣言

P 2

縁故米運動とは？

P 3

縁故米基金

P 4

縁故米運動へ
あなたも参加しませんか？

P 5

縁故米運動の目指すもの

樋田 劭

P 7

縁故米運動応援メッセージ①

星 寛治

P 8

縁故米運動応援メッセージ②

山下 惣一

P 9

農業と食糧に関する
戦後史年表

P 10

農産品取り扱いの
方向について

縁故米運動宣言

日本は、食料の60%を外国に依存しています。農業よりも工業を重視し、マネーゲームにうつつを抜かしている間に、大切な農村が荒廃しようとしています。生産者は高齢化し、圧倒的多数を占める小規模農家に後継者が見つかりません。大規模農家ですら、市場原理というモノサシの中で、輸入農産物との競争にさらされています。また、食料を外国に依存したことによって、BSEや遺伝子組み換え作物といった、食に由来する不安材料が次々と私たちを脅かしています。

何でもお金で解決できるというおごりと、グローバル化の相乗作用で、この流れはますます加速していくでしょう。この国は、豊かな自然環境や、そこで暮らす人々の健康よりも、経済的な価値を優先する危険な道を進んでいます。政府も食糧管理制度を廃止して、農と食の責任を放棄してしまいました。日本の農業と農村、そして日本の米は、もう自分たちで守るしかありません。

私たちは会発足以来30余年、生産者会員と消費者会員が農の安定と食の安全を目指して、家族的な信頼と協力を積み重ねてきました。その実践の上に、私たちの稲作と米の食卓を守ります。安心して生産を続けるためには、無責任な投機的市場にまかせるのではなく、生産農家の生産意欲を維持しうる安定価格を守らねばなりません。また、農業後継者や新規就農者を元気づける理解と協力の輪を強める必要があります。

私たちはここに、そのための取り組みとして、「縁故米運動」を始めます。

2006年8月23日 NPO法人
使い捨て時代を考える会

縁故米 運動 とは？

食糧制度が廃止され、外国からの米の輸入は年々増えていきます。一方、日本人の米の消費量は減り続け、余剰傾向の中、生産者米価も右肩下がりです。このような状況を背景に国は、「担い手安定対策」の名の下、小規模稲作農家を切り捨て、「意欲のある」、「規模の大きな」農家を支援しようとしています。しかし、農業はスケールメリット、経済合理主義によって維持できるものではありません。中山間

地が多い日本の伝統的な農業、農村は家族のようないくつかの小さな単位だからこそ続けて来られたのです。

高齢化する稲作農家は、先祖から受け継いだ農地を必死になんて守つてきました。それが今やこの大きな流れの中に飲み込まれようとしています。今後、輸入米の関税が下がり、「安くてもおいしい米」が大量に入ってきたとき、誰が割に合わない米づくりを引き受けるのでしょうか。今は余っているかに見える「国産の米」が、欲しくても手に入らなくなるのは、遠い将来の話ではありません。

今から33年前の1973年にスタートした使い捨て時代を考

える会は、設立の当初から日本の農業と食の問題について、分断された生産者と消費者とがお互いの利害を超えて信頼でつながっていく必要を強く考え、1975年にはそのことを具体化するために共同購入事業（安全農産供給センター）を立ち上げました。その後の30年で、有機農業や有機農産物は広く認知され、会員組織に属さずとも「安全な食品」は容易に購入することができるようになりました。にもかかわらず、日本の農業はますます危機に瀕しています。かつて私たちは、商品化される農産物に異議申し立てをしてきたのですが、今や有機農産物ですら「商品」となつてしまい、「共同購入」

は限りなく「個別配達」にシフトしつつあります。

そのような状況であるからこそもう一度会の設立理念を思い起こし、問題提起をしていくことにしたのです。

「縁故米」というのは、都会で暮らす子どもや孫、親戚のために、食べ続けてくれる人たちの喜ぶ顔を思い浮かべながら作られ、届けられたお米のことです。そしてお米だけではなく、野菜も加工食品もすべて、いのちを育む食べものというのとは本来そのようなものであるはずだという考え方に立って、私たちはこの動きを「縁故米運動」と名付けました。

縁故米 基金

会員農家の生産を維持していくために、生産者と消費者とで「縁故米基金」を作ります。

基金は、「縁故米運動」の主旨に賛同する生産者と消費者が、米1kg当たり20円を基本に、その出荷量と注文量に応じて拠出した寄付金、及び任意の寄付金を財源とします。今年、2006年産米からスタートし、現状では年間およそ150万から200万の寄付金が見込まれ、当面は1000万を目標に積み上げます。

基金は、生産、消費、流通の3者からなる「縁故米運動推進委員会」によって管理され、左記のような事業に運用されます。

1 生産の維持と後継者育成の支援

2 不足時のための備蓄

3 米加工生産者と協力しての余剰米の有効利用

4 消費拡大のためのキャンペーン

5 天災などによる被害への経済的支援

さらに今後は、この運動を維持・発展させるために、お米を加工する生産者へも参加を呼びかけていきます。味噌、醤油、酢、みりん、酒、餅、米菓子など、米を原材料とする加工食品は数多くあります。また、現在その多くを輸入に頼っている家畜飼料についても、米を転用することが可能です。加工米、飼料米についてはコストという高いハードルがありますが、生産・消費・流通の3者が真剣に話し合うことで、理解・納得できる方法を見つけられると考えています。

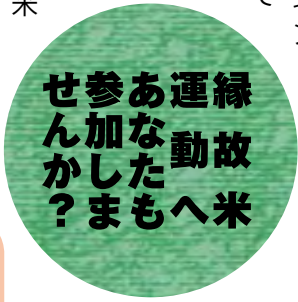
縁故米基金
運用事業

この運動の主旨に賛同していた
だけなのであれば、ぜひ参加して、
共に運動を広めていきましょ。う。
参加するためには、まず、使い捨
て時代を考える会の会員になり、
その上で、安全農産供給セン

ターの出資会員となつて
下さい。出資会員にな
ると、共同購入(個配
も可)を通じて有機米、
または低農薬米を購入
することが出来ます。そ
して購入量に応じて縁故米
基金に寄付をしていただくこ
とになります。

また会員にならなくても、それ
ぞれの地域やグループで「縁故米
運動」を展開する事はもちろん可
能です。日本中の様々な地域で同
様の動きが広がっていったとき、
この国の農業と農村に未来への希
望が開けるのです。

ともあれ、まずは下記までご連
絡下さい。



NPO 法人 使い捨て時代を考える会

「モノの使い捨て」、「環境の使い捨て」、「ヒトの使い捨て」・・・。「使い捨て」に象徴されるこの「時代」を問い直そうと、1973年に京都で設立。以来30余年、まずは自分たちの暮らしを見直すことから、「農業」、「たべもの」、「資源」、「ゴミ問題」、「環境」などについて、様々な取り組みを続けている。

〒 600-8061
京都市下京区富小路通仏光寺下る
筋屋町 141
電話 / FAX : 075-361-0222

E-mail : tukaiste@sirius.ocn.ne.jp
URL : <http://www2.ocn.ne.jp/~tukaiste/>



株式会社安全農産供給センター
使い捨て時代を考える会の会員が出資して、有機農産物、国産・無添加食品などの共同購入事業を行うため、1975年に設立。配送エリアは京都府南部、滋賀県南部、大阪府北東部。会員生産者による農産物は、野菜がほぼ100%無農薬・無化学肥料栽培、米は年間扱ひ量約60トンのうち6割が無農薬・無化学肥料栽培。

〒 611-0041
京都府宇治市槇島町目川 118 - 7
電話 : 0774-22-4634
FAX : 0774-24-9512
E-mail : info@anzennousan.com
URL : <http://www.anzennousan.com/>

日本のコメを守るために

——金主主義を超えて——

槌田 劭



日本の稲作は風前の灯である。消費の低迷によるコメ余りの現実の前にはまだ実感に欠けるが、今すでに深刻である。再生産不可能な低米価にコメ輸入の圧力が強まる中、稲作農民の年齢は70歳近い超高齢化である。誰が稲作を続けるのだろうか。

どうしてこんなことになってしまったのだろうか。敗戦時の虚脱状態と絶対的窮乏の中で、日本人はアメリカの物量豊かな社会への羨望を強めた。欲求不満をバネとして、高度経済成長に暴走したことを背景としている。お金こそが正義であり、力である時代——金主主義と私は呼ぶのだが——経済合理性が全てを支配するようになった。いのちの論理をお金の論理がおし潰すことになり、商工業の繁栄が農村と農業の衰退をもたらした。私たちの責任だ。

コメのない食卓は考えられない。93年の凶作と翌年のコメパニックを思い出す。コメ不足の予測はコメの先物相場形成へと進む。米価暴騰さえ覚悟すべきだろう。生活必需のコメは、量的にも価格的にも安定していなければならない。

そのためには生産者と消費者の相互理解と協力が欠かせない。再生産可能な安定米価と安定消費が大切なのである。消費者はコメを大事に食べたい。安い高いではなく、いのちの糧なのだ。現在、市場の消費者米価は安すぎて、再生産不能水準にある。茶碗一杯のご飯15杯が喫茶店の珈琲1杯と同価とは信じがたいことではないか。

生産者も稲作を続けられるよう後継者確保の道を真剣に探る必要がある。個々の農家の努力に加え、地域協同の努力が必要になるだろう。

私たちの会は、「農産品取り扱いの方向について」(P.10)にあるように、生産者会員と消費者会員の緊密な信頼と理解を基に一体的協力関係を求めて30年余の実績を持つ。その実績の上に縁故米運動を成功させたいと思う。

樋田 劭

1935年、京都市生まれ。1967年、京都大学工学部助教授となる。1973年、使い捨て時代を考える会を発足、中心的役割を担う。1979年京都大学を辞職、京都精華大学教員となる。2001年、使い捨て時代を考える会のNPO法人化に伴い、代表理事に就任。事務所のあるビルの屋上は全面有機菜園となっており、会員と共に「星降る畑クラブ」を運営している。

草の根から日本の田んぼを守る

— 京都からの鮮烈なメッセージ —

星 寛治



このままでは、田んぼは原野に帰り、食卓からご飯が消える。心ある人々は、本音でそう思っている。国が打ち出した新農政で、状況はさらに悪化し、農村は崩壊の一途をたどるのではなからうか。

これまで地域住民がみんなですべて守ってきた里山や田畑、水路や農道などの生産財として共に暮らす生活環境を整える仕事を、特定の大きい農家だけでやれるはずがない。集落営農もなかなかハードルが高い。行きづまれば放棄するか、資本に身売りする他はない。

そうさせないために、京都の人々は立ち上がった。「縁故米運動宣言」、何とまぶしい言葉だろう。生産者・消費者がしっかりと手を結び、田んぼも食卓も守りぬく。市場原理を超えるいのちの論理を持ち、しかも実行ある自主食糧のシステムを作動させ、危機に立ち向かう。明日をみつめるまなざしは、明るくおおらかだ。

京都からの波動が、各地に広がることを願ってやまない。

星 寛治

1935年、山形県高島町生まれ。1954年、高校卒業後就農。1975年、高島町教育委員に就任、1983年より1999年まで教育委員長。2001年より東京農業大学客員教授。2002年よりたかはた共生塾塾長。米、林檎、自給野菜、雑穀、山林などを組み合わせた複合経営を家族農業で続けてきた。農民詩人として、詩集「滅びない土」、「はてしない気圏の夢をはらみ」、エッセイ「鎌の詩」、「有機農業の力」など著書多数。

高感度センサー集団がはじめた

新たな取り組みに「納得！」

山下 惣一



「消費は美德」「消費者は王様」という言葉が流行し、大量生産、大量消費、大量廃棄が、まさに沸騰していた時代にその破局を予見して「使い捨て時代を考える会」に集った人たちのセンサーの感度は、実際の時代の推移に三十年ぐらい先行しているといえそうです。昨今、外国の人から「もったいない」という日本語を教わって感動している人もいるようで、とんだお笑い草ですよ。

さて、その高感度センサー集団が、日本の米不足を予測してこの度、基金まで創設して「縁故米運動」をはじめられるそうで「なるほど」と納得しています。こんどは三十年はかからないでしょう。農家が営む農業は駆逐され、人間の生存そのものが「商品化」「投機化」される時代はすでに始まっています。この方向でいいはありません。「縁故米運動」にエールを送ります。私もあと十年ほどはがんばってみるつもりです。

山下 惣一

1936年、佐賀県湊村（現唐津市）生まれ。1952年、佐賀県東松浦郡湊村立湊中学校卒業後、家業の農業に従事。かたわら農ジャーナリスト、作家として筆をとる。山形県川西町の生活者大学校（劇団こまつ座主宰）教頭、農民連合九州・共同代表、アジア農民交流センター代表などを務める行動派農民作家。『農の時代がやってきた』（家の光協会）、『身土不二の探究』（創森社）など多数の著書がある。

農業と食糧に関する戦後史年表

年	主な出来事	総人口 単位:千人	農業者人口 単位:千人	耕地面積 千ヘクタール	1人当たりの 米の消費量 kg	食糧自給率 %
1945 昭和20	日本、第2次世界大戦に敗戦	72,147	34,137			
	第1次農地改革(地主制の解体)が始まる					
1951 26	国連食糧農業機関(FAO)に加盟					
1955 30		89,276	36,347		110.7	
1957 32	八郎潟干拓事業始まる					
1960 35	農林水産物121品目が自由化		34,411	6,071	114.9	
1961 36	農業基本法制定					78
	大豆の輸入自由化					
1964 39	レモンの輸入自由化					72
1970 45	米の生産調整(減反政策)始まる。	103,720	26,594	5,796	95.1	60
1971 46	豚肉など37品目が輸入自由化				93.1	58
1972 47					91.5	57
1973 48	第1次オイルショック				90.8	55
	アメリカ、大豆の輸出制限				89.7	
1975 50		111,940	23,197	5,572	96.2	54
1985 60		121,049	19,839	5,379	73.4	53
1990 平成2			13,878	5,243		48
1991 3	牛肉・オレンジの輸入自由化					46
	生産緑地法の改正					
1993 5	戦後最悪の大凶作					37
1994 6	食管法が廃止になる				64.8	46
1995 7		125,570	12,037	5,038		43
2002 14		126,479	9,898	4,762	62.7	40
2003 15	アメリカでBSE発生	126,688	9,647	4,736	61.9	40
2004 16		126,824	9,400	4,714	59.5	40

農産品 取扱いの 方向について

私たちが取り巻く食糧事情は量と質の両面で厳しい状態になっていく。よく知られているように日本の食糧自給率は50%以下で、今日では約半分の食糧を外国に頼っているのだ。すなわち、もし世界に異常気象や国際政治の動乱がおこったなら、私たちが戦時戦後に経験した以上の飢饉に見舞われる危険が十分あることを、これは意味している。そして、このような状況の改善の見通しは立っていない。農地の宅地・工業用地・道路などへの転用はすすみ、専業農家は減る一方である。昨年(注：1975年)の中・高卒者92万人のうち、農業を継いだ者はわずか一人人という統計が、農村の将来を予言している。さらにまた、農業は工業生産性との競合を強いられ、機械化・化学化により変質し、化学肥料・農業の多用で農地の荒廃はすすみ、農産品の安全性もいちじるしく失われた。そのことは私たちの健康維持にも悪影響を与えている。

よつてもたらされたのか。あの高度成長で「便利で豊かな生活」が拡大し、その波は農村と農村生活にもおよんだ。都会に華美な生活があるとき、誰が泥と汗にまみれて働くことをするだろう。不必要な自動車を高速で走らせるために、地力豊かな土地はブルドーザーのエンジンと化して。私たちが、便利だ豊かだと浮かれて使い捨ての大量消費をすすめればすすめるほど、それを支える工業は肥大し、資源は浪費され、環境破壊は拡大し、そして農業はさらに荒廃していく。このことに思いをいたすなら、私たちは安全な農産品を安定して確保したいと希望する前に、自身身の生き方・考え方に、真剣で鋭いメスを加えるべきではなからうか。その努力を行わずして、ただ安全なもの欲しいと叫ぶだけでは、結局それはエゴイズムでしかない。本会が、安全農産品を「考える素材」として重要視しているのは、その努力をみんなで積みかさねたいためである。

産物の生産・供給・消費における新しい流れの形成”である。農業の荒廃とともに私たちの生活態度が放漫になりきった現代においては、この作業は容易なものではない。多くの困難が次々とたちあらわれるに違いない。それらをのり越えるためには、生産者、消費者の深い信頼に基礎をおいた緊密な協力が不可欠である。消費者の喜びが不とする生産者が、また生産者の喜びを自分の喜びとしうる消費者と結びついて助け合うことがなくして、私たちの前に道はひらけない。個々の局面で一喜一憂したり、自己の利益を主張しあつたりせずに、すべてを前向きに、さらにお互いの役割を尊重しあうことが必要なのである。

私たちが取り巻く食糧事情は量と質の両面で厳しい状態になっていく。よく知られているように日本の食糧自給率は50%以下で、今日では約半分の食糧を外国に頼っているのだ。すなわち、もし世界に異常気象や国際政治の動乱がおこったなら、私たちが戦時戦後に経験した以上の飢饉に見舞われる危険が十分あることを、これは意味している。そして、このような状況の改善の見通しは立っていない。農地の宅地・工業用地・道路などへの転用はすすみ、専業農家は減る一方である。昨年(注：1975年)の中・高卒者92万人のうち、農業を継いだ者はわずか一人人という統計が、農村の将来を予言している。さらにまた、農業は工業生産性との競合を強いられ、機械化・化学化により変質し、化学肥料・農業の多用で農地の荒廃はすすみ、農産品の安全性もいちじるしく失われた。そのことは私たちの健康維持にも悪影響を与えている。

よつてもたらされたのか。あの高度成長で「便利で豊かな生活」が拡大し、その波は農村と農村生活にもおよんだ。都会に華美な生活があるとき、誰が泥と汗にまみれて働くことをするだろう。不必要な自動車を高速で走らせるために、地力豊かな土地はブルドーザーのエンジンと化して。私たちが、便利だ豊かだと浮かれて使い捨ての大量消費をすすめればすすめるほど、それを支える工業は肥大し、資源は浪費され、環境破壊は拡大し、そして農業はさらに荒廃していく。このことに思いをいたすなら、私たちは安全な農産品を安定して確保したいと希望する前に、自身身の生き方・考え方に、真剣で鋭いメスを加えるべきではなからうか。その努力を行わずして、ただ安全なもの欲しいと叫ぶだけでは、結局それはエゴイズムでしかない。本会が、安全農産品を「考える素材」として重要視しているのは、その努力をみんなで積みかさねたいためである。

産物の生産・供給・消費における新しい流れの形成”である。農業の荒廃とともに私たちの生活態度が放漫になりきった現代においては、この作業は容易なものではない。多くの困難が次々とたちあらわれるに違いない。それらをのり越えるためには、生産者、消費者の深い信頼に基礎をおいた緊密な協力が不可欠である。消費者の喜びが不とする生産者が、また生産者の喜びを自分の喜びとしうる消費者と結びついて助け合うことがなくして、私たちの前に道はひらけない。個々の局面で一喜一憂したり、自己の利益を主張しあつたりせずに、すべてを前向きに、さらにお互いの役割を尊重しあうことが必要なのである。

このような荒廃はいったい何に

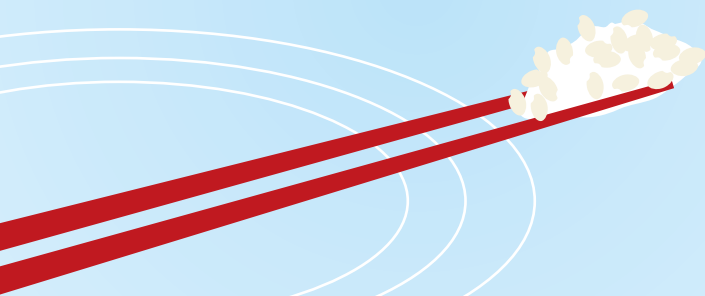
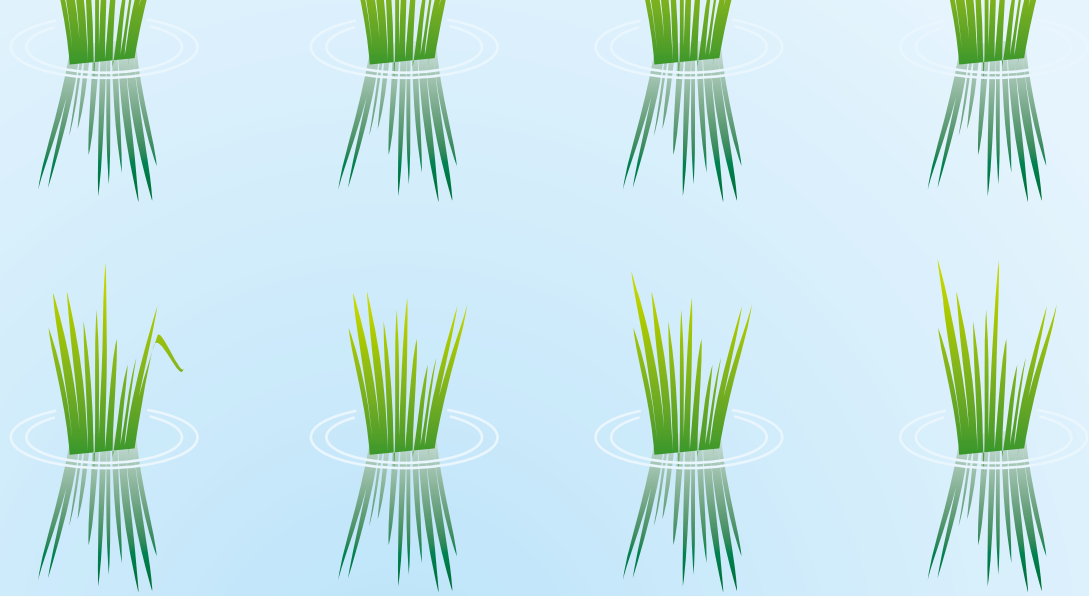
それにしても、事態は深刻の度を加えている。私たちができることは、すぐに着手しなければならぬ。そのささやかな一部が安全農産品供給センターの設立であり、具体的な農

私たちが、ひとつの家族のような緊密な信頼に結ばれたひとつの輪をつくり、生産者・消費者の立場の違いを超えて協力する努力を始めたのなら、この輪は狭く閉じることなく拡げていかねばならない。この努力の継続によってこそ安全な農産品の安定した供給は実現する方向に向かうだろう。

1976年1月20日

使い捨て時代を考える会
例会において採択





2006年11月

NPO法人

使い捨て時代を考える会